

るジェイムズが主張したことは、個人が生きる世界は常に動的であるということであり、それは世界の断面を切り出して静的な世界観に回収するような一九世紀的科学に対する徹底した批判だったということになるだろう。

「信」をめぐる

—— 認知科学的観点からの現実／虚構 ——

谷 内 悠

本発表は、「現実／虚構」概念の流動性を指摘した上で、発表者が構築した「信」概念を軸とする新たな理論によって、その構図とその奥にある世界認識のあり方を捉えようとするものである。

まず、論理学などの分野で行われてきた虚構的言説の分析（記述理論など）では、例えば、小説に書かれた文章は虚構を表しているということが前提となまっていることを指摘した。つまり、客観的にはつきりと「現実なるもの」と「虚構なるもの」が分けられると考えられているのである。しかし、「現実／虚構」の区別は、そのように確固たるものではない。そこで、よりマクロな視点を取り入れるため、分析哲学の大家であるクワインの「概念図式」の概念に注目した。「概念図式」とは、経験を整理し、世界を認識するための枠組みであり、言明の織りなすタペストリーのようなものである。

クワインは、自然科学（以下、科学）がもつとも効率のよい

「概念図式」であると言う。確かに近代以降、科学の「概念図式」は生活の多くの局面で正しいものとなった。それは現実を扱うものであると考えられているため、「科学が認めないものが虚構である」とすら言えるだろう。しかし、科学の「概念図式」においても「現実／虚構」は揺らいでいる。本発表では、ヴァーチャルリアリティの例を引いた。中でも、ヴァーチャルリアリティの根本を認知科学的に顧みることで、「ほんとうの現実」と思われているものすら、脳が構成したヴァーチャルな世界であると言える、という点は重要である。

さらに、科学という「概念図式」自体が相対的であるため、「現実／虚構」は二重に揺らいでいることになる。「概念図式」の相対性を論じるためには、クワインの相対主義的立場からはじめ、独自の理論を構築することが必要となる。発表者は、複数の「概念図式」が相対的に可能であることから、状況に適した「概念図式」を選択するための「メタ概念図式」なるものを指定した。それは、周囲の人たちと共有されており、状況によって適切な「概念図式」を選択することで、人々の円滑なコミュニケーションを可能とする。

そのような「概念図式」の切り替えは、「現実／虚構」の切り替えでもある。ただし、科学の例のように、「概念図式」内で揺らぎがある場合もある。さらに、「メタ概念図式」をほんとうに共有しているかどうかは証明が不可能なため、実は我々は「メタ概念図式」、ひいては「概念図式」を共有していると「信」じているだけということになる。我々が「現実」と思っているものは、「現実であるかのようなもの」に過ぎないのだ。

このように「メタ概念図式」すら相対的にしか定まらないのであれば、我々のすべての認識は無根拠である。そのような無根拠性は、「信」によつて覆い隠されていると発表者は考える。我々は同じ「現実（かのようなもの）」を同じように見ていると「信」じることによつてしか、無根拠に脅かされることなく生きることができない。

そして、無根拠の上に所在なく佇んでいる「現実かのようなもの」は、広義の〈虚構〉概念に含めることができるだろう。改めて「現実／虚構」の区別は崩壊し、〈虚構〉は豊かな力をもつものとなる。この〈虚構〉こそが、「信」と並ぶ発表者の研究対象である。

最後に、科学もまた「信」じられているものに過ぎないことを述べた上で、宗教学において科学がいかに扱われるべきかという問題にも多少触れた。現代において、科学を忌避することはできないが、過大な期待をすることは危険である。自然科学の「概念図式」が捉えきれないものを、人文科学の「概念図式」は扱い得るだろう。本発表は、それを示す試みでもあった。

近年の宗教心理学における死と宗教

——比較的考察——

イーリヤ・ムスリン

本発表では、全般的な宗教の説明を目指して、ここ二十年以上宗教学研究に多大な影響を与えている三つの大理論（恐怖管理理論、宗教の合理的選択理論、進化心理学）を取り上げてい

る。発表の主な目的は、それぞれの理論における宗教概念や死の捉え方を簡潔に分析した上で、これらの理論における宗教と死の関係に対する考え方を比較し、問題点や課題を指摘することである。その際、宗教の多様性を重視し、研究者の宗教概念を問いながら自文化中心の態度を批判する宗教学的なアプローチ、また死の不安の多面性や複雑性を意識する死生学的な立場を念頭に置いている。

三つの理論における死の位置付けを考察すると、次のようにまとめることができる。恐怖管理理論（TMT）は、死の不可避性や自己の有限性に対する意識と死への不安・恐怖の普遍性を想定し、それに基づいて宗教を説明しながら、死の不安の緩衝を宗教の最大の機能ないし魅力としている。研究の主な対象は、死に対する無意識な不安とその行動への影響であり、これらが宗教の発生や維持を説明する上で不可欠な観点である。これに対し、宗教の合理的選択理論（RCT）は、宗教を説明するための複数の理論的な前提の中に人間の普遍的な心理として不死への欲求を盛り込む。そして宗教全般を、その欲求を満たすような約束を提供するものとして捉えながら、経済学的な概念を用いて、宗教市場の動向や教団の形成・特徴・ライフサイクルなど、主に社会レベルの宗教現象に注目する。つまり、死に対する意識は中心的な研究対象というより、理論の重要な出发点であると言える。これとは異なつて、進化心理学（EP）は、全体としてみれば、宗教における死という問題をそれ程大きく取り上げない傾向がある。EPでは、宗教概念の形成や特徴、その伝達、または道徳的な規範、儀礼、聖職者階級の形成